

## 東日本大震災以後の高校生の体験と健康

○<sup>しむらさとみ たけはな</sup>志村里美、竹鼻ゆかり、<sup>あさくらたかし</sup>朝倉隆司(東京学芸大学)

**【背景】** 東日本大震災により、人々の健康や生活には甚大な被害がもたらされた。今後、高校生においても、多様な健康課題が出現し始めるのではないかと考えられる。よって本研究では、東日本大震災以後の高校生の体験と健康を明らかにすることを目的とした。

**【方法】** 平成24年1月から2月に福島県立S高校に在籍する生徒676人に対して自記式質問紙調査を実施した。調査の内容は、基本的属性(性別、学年)、被害状況(被害形態、被害の大きさ、現住居、転居回数、家族や友人の喪失体験)、震災をきっかけにした学習における変化(学習に対する心理的变化、学習環境の変化)、震災後の生活の困難度(家財の損壊・不足による困難、公共財の損壊による困難)、精神症状(CES-D)である。変化と困難度については、因子分析により尺度化した得点を用いた。

なお調査に当たっては、当該学校長ならびに教員、生徒の同意を得た上で、東京学芸大学研究倫理委員会の審査で承認を得て実施した。

**【結果・考察】** 被害形態は、津波・地震・原発、が32%、地震、が20%、地震・原発、が19%であった。被害程度は、やや大きかった、非常に大きかった、が54%と半数を超えていた。転居経験がある者は、33%であり、現在の住居は、自宅外、が18%であった。家族や友人の喪失体験がある者は、24%であった。

授業に一生懸命取り組むようになったなどの「学習に対する心理的变化」(M=7.60, SD=2.09)が有意に高かった群は、津波と地震と原発による三重被害(M=7.77)、非常に大きい被害(M=7.98)、自宅外の現住居(M=8.15)、転居回数が2回以上(M=8.02)、家族や友人の喪失体験あり(M=8.27)だった。勉強する時間や場所の確保が困難になった、などの「学習環境の変化」(M=6.08, SD=2.38)が有意に高かった群は、津波と地震と原発による三重被害(

M=6.44)、非常に大きい被害(M=7.21)、自宅外が現住居(M=7.42)、転居回数が2回以上(M=7.64)、家族や友人の喪失体験あり(M=8.27)であった。

自分の部屋やスペースの確保、などの「家財の損壊・不足による困難」(M=10.22, SD=4.07)が有意に高かった群は、津波と地震による二重被害(M=9.16)、非常に大きい被害(M=10.76)、自宅外の現住居(M=12.04)、転居回数が2回以上(M=11.92)、家族や友人の喪失体験あり(M=9.68)、であった。食料の確保、などの「公共財の損壊による困難」(M=10.48, SD=2.76)、で有意に高かった群は、津波と地震による二重被害(M=10.63)、非常に大きい被害(M=11.01)、自宅外の現住居(M=11.21)、転居回数が2回以上(M=11.37)、家族や友人の喪失体験あり(M=11.04)、であった。

つまり、東日本大震災の被害により、高校生の生活は、大きく変化したことが推測される。

抑うつ得点(CES-D)の平均値(標準偏差)は11.95(5.65)点であった。

性別、学年をコントロールし、抑うつ得点(CES-D)を従属変数とし、被害状況、学習体験、生活困難度、を各々独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、被害の程度が大きい、転居回数が多い、家族や友人の喪失体験がある、学習環境の変化が大きい、家財の損壊・不足による困難が大きいほど、抑うつ得点(CES-D)が有意に高かった。よって、東日本大震災の被害や体験が精神的健康に影響を及ぼしていることが示唆された。

**【結論】** 東日本大震災の甚大な被害により、高校生は、学習に対する心理的变化や学習環境に変化があり、家財の損壊・不足による困難や公共財の損壊による困難を感じていた。さらに、被害の程度や転居回数、家族や友人の喪失体験などの被害状況と、学習における変化、震災後の生活の困難度は、精神的健康度に影響を及ぼしていた。

E-mail ; m112301g@stu-gakugei.ac.jp